

# 甘い人生

2005(平成17)年5月1日鑑賞(ナビオ TOHO プレックス)

★★★★



監督・脚本=キム・ジウン/出演=イ・ビョンホン/キム・ヨン Chol/シン・ミナ/キム・レハ/ファン・ジョンミン/エリック (日本ヘラルド映画配給/2005年韓国映画/120分)

……イ・ビョンホンが、「これは私の代表作になる」と宣言した最新のハードボイルド作品。シンプルなストーリー構成だが、ヤミ組織の中で将来を囑望された若手エリートが、一転して貧乏クジをひくことになったのはなぜなのか……？ 泥まみれ、血まみれの熱演は想像をはるかに超えたもの。イ・ビョンホンにはこの後、アラン・ドロンの名作『太陽がいっぱい』や『地下室のメロディー』などの韓流リメイク版を期待したいもの……？

## タイトルと中身は大違い！

イ・ビョンホンの最新作『誰にでも秘密がある』(04年)は、3人の美人姉妹のすべてからモテモテの甘い甘い夢のようなストーリー。また、その前に観た『純愛中毒』(02年)も記憶喪失の中、兄嫁との間に展開されるホントに美しい純愛物語(?)だった。その結果、この映画のタイトルを見て、私はそれらの延長線の作品かと思っていたが、事前に新聞の評論を読むと、結構ヤクザな物語らしい。果たして実際は……？ タイトルと中身は大違い！ まさに、イ・ビョンホンが宣言しているように、この映画はきっと彼の代表作になるであろうと思われるハードボイルド作品だ。というより、そんな表現をはるかに超えた、ビックリするような泥まみれ、血まみれの迫真の演技に注目だ！

## 順風満帆の主人公だが……？

イ・ビョンホン扮する主人公キム・ソヌは、ソウル中心部にあるホテルのラウ

ンジとレストランの総マネージャー。いつもネクタイをきちんと締め、上品なダークスーツを着こなしているソヌは、すべての仕事を完璧にかつそつなくこなす優秀なビジネスマン……。しかしこんなソヌには実はもう1つの顔があった。それは……？ 閉店にもかかわらず居すわり続けていたペク社長（ファン・ジョンミン）の部下たちに対して、ウラの顔で示すソヌの腕力（？）のほどは……？

### シンプルな物語のポイントは？

この映画は、物語自体はシンプルなもの。今やソヌはボスであるカン社長（キム・ヨン Chol）の片腕としてその信頼を一手に集めていた。そのため、カン社長がソヌに対してあるプライベートな依頼（指示）をした。それは自分が留守にする3日の間、愛人の行動を監視してもらいたい、というごくかわいいもの。しかしその後がコワイ。思い過ごしであることを願っているものの、もし自分が密かに心配しているようなことがあれば、2人を殺してしまえ、もしくはケイタイに連絡しろとソヌに対して命令を下したから、さあ大変……？

### 「両雄並び立たず」はいずこも同じ……？

ソヌはカン社長の片腕になっているが、一般論として、片腕や側近は1人ではなく複数存在するもの。そしてそのナンバー2の座をめぐるバトルがあるのも当然のこと。ソヌは7年間ずっと忠実にカン社長に仕えてきた結果、現在頭角を現してきた人物だが、それを心よく思っていない別の存在があるのも当然。それがこの映画では、ソヌとは全く違うタイプのムン・ソク（キム・レハ）だ。ソヌが知的でクールなのに対してムン・ソクは粗野で暴力的。しかし、権力者＝ボスは、こんないろいろなキャラの部下を使いこなしてこそ、その価値が高まるというもの。それは、現在の小泉総理大臣を見てもわかるはず……？ そしてまた、「両雄並び立たず」は古今東西を問わず昔からの鉄則。さて、この2人は……？

### 組織人としてのソヌはちょっと幼稚……？

ラストの「対決」の中、ソヌは「一体どうして、こんなことになってしまったのだ？」「俺を殺そうとしたのは本心なのか？」「俺は7年間も犬みたいに忠実に

あんたに尽くしてきたのに……？」とボスへの恨み節(?)をアピールする。しかし、私に言わせれば、これはソヌの組織人としての幼稚さを示すもの……。その点は、むしろカン社長の、「組織は家族であり、運命共同体なのだから、ボスが多少まちがったことを言っても命令は絶対として従うべきだ」という主張のほうが明快で合理的。この組織維持のための原理原則は、イタリアのマフィア社会を壮大に描いた『ゴッドファーザー』(72年)をみても明らか……。

### オッサンは意外にウブ……？

カン社長はウラ社会のボスであり、非情の人物。ところが、男と女の関係においては結構ウブ……？

カン社長が若手のチェロ奏者でオモテ社会に生きている女性ヒス(シン・ミナ)に惹かれたのは、何よりもヒスの持つ若さと恐さ知らずの天真爛漫さ。もちろんこれは、女だから許されることだし、またそんな女だからこそ、カン社長のような非情なおっさんが惹かれていったのだが……。

しかし、所詮男と女の関係においては、追う方が弱く、追われる方が強いもの……？ ヒスは必ずしもカン社長の援助や庇護、ましてやその愛情が欲しいわけではない。またカン社長も、権力にモノを言わせてヒスを養っている(困っている)わけではなく、あくまで愛情が前提。そうすると、この2人の男女の良好な関係の維持は当然難しいはず……。そして、カン社長は最近、ヒスの態度が自分に対して冷たいため、誰か他に男がいるのでは、とごく素朴な男としての疑問(疑惑)が……？ このようにしてみると、中年男としてのカン社長は結構ウブ……？ そこで、組織のボスとしてのカン社長がとった行動は……？

### ヒスは魅力的だが……

パンフレットには、ミルクマン斉藤氏の「幻想を破壊するのもまた幻想である」と題するちょっと小難しい解説があり、そこには面白い「ファム・ファタール」＝「運命の女」論が展開されている。たしかにこのヒスは今までの一般通念にあるいわゆる「ヤクザの情婦」というイメージとは全く異質で、今まで見たことのないタイプ。ヒスは一方ではかたぎ社会(?)の中で、チェロ奏者として普

通の日常生活を営みながら、他方ではカン社長の「囲われモノ」として超豪華な一軒家に住んでいる。こんなことは普通はできるはずのないものだが、このヒスはホントに両立させている様子……？ しかもそれに飽き足らず(?)、オッサンが長期出張の時、若い男とイチャつくとは……？ そりゃいくら恐れ知らずの若い女性といえども、ちょっとやりすぎでは……？

### ソヌは損な役回り……？

絶対的存在のボスであるカン社長の命令をソヌが忠実に実行した結果、ヒスが若い彼氏とイチャイチャしている現場を押さえたのはさすが……。ところが、ここでソヌがとった行動は……？ なぜか、ケイタイによるボスへの連絡の手が止まり、「2度と会うな！ 何もなかったことにすれば問題はない」と言って男を追いつことに……。これは明らかな命令違反！ なぜソヌはそんな行動をとったのだろうか？ ひょっとして、ソヌはこの美しい女に惹かれたのか？ そんなバカな！ 果たしてソヌの選択は正しかったのだろうか？

ここで私が男としてどうしても気に入らないのは、こんな重大な選択をしたソヌに対するヒスの「命の恩人に感謝しろと？ そんなの無理よ。忘れられないわ」という言いグサ！ これはあまりに……？

私としては、せめて少し温かい言葉くらいはソヌに対してかけてやれないのか、とヒスに対して強く言いたいのだが……。

### 韓国のヤクザはホントに銃を持ってないの……？

映画の前半、ソヌへの信頼を裏切られたカン社長の命令を受けたムン・ソクとその手下によってソヌが徹底的に痛めつけられるシーンが延々と続く。イ・ビョンホンのファンは、このシーンを固唾を呑みながら見守っているはず……？

そんなソヌは、自分でも十分気持の整理がつかないまま、「最後までやる」ことだけは決意。他方、ボスのカン社長は既に「カタをつけてやる」と各界への宣言(?)を終えていた。何の組織も持たないソヌが強大な組織＝ファミリーに対抗するためには強力な武器が必要。ところが韓国は銃を手に入れるのはすごく難しいらしい。そこでソヌはロシア銃器密売組織と接触して銃を手に入れるわけだ

が、ここらのからくりが私にはどうも納得がいかない……？

私が納得できないのは次の3点だ。まず第1は当然ロシアの銃器密売組織のボスはカン社長と知り合いだから、ソヌがそこと連絡をとっても、「誰の紹介だ?」「保証人は誰だ?」となるのは当然。ところが、本来厳格であるはずのこの銃器密売組織に、一匹狼に落ちぶれ果てているソヌがやすやすと接触してきたうえ、まんまと大量の銃を手に入れてしまうこと。第2に納得できないことは、韓国では銃を手に入れることが難しいとしても、カン社長ほどのボスになれば、銃を手にしたボディーガードが何人かいるのが当然のはず。ところが最後の決戦まちがいなしとなった状況においても、カン社長らが1丁も銃を手を持っていないこと。第3に納得できないのは、ソヌの一発の銃弾によってカン社長が死亡した後は、突然「これでもか、これでもか」という派手な銃撃戦の応酬になること。それなら最初からカン社長の側も銃で防備しておけばいいのにと、つい思ってしまうことに……？

## アラン・ドロンカイ・ビョンホンか？

パンフレットのインタビューの中に、「キム・ジウン監督はイ・ビョンホンさんにアラン・ドロンのイメージを重ね合わせていたそうですが」という質問がある。私もダークスーツに身を包んだクールなイ・ビョンホンの姿を見ている間ずっと、アラン・ドロンの当たり役を韓国風のリメイクすれば最高に適役なのでは、と思っていた。『太陽がいっぱい』(60年)や『地下室のメロディー』(63年)などをリメイクするのにピッタリな感じ。ちなみに『黒いチューリップ』(63年)は舞台をフランスから韓国の圧政時代に変えただけではちょっとムリだろうが……？ いずれにしてもイ・ビョンホンが旬のうちに(?)、ホントにリメイクしてもらいたいものだ。

2005(平成17)年5月2日記